

大阪芸術大学所蔵
「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料作成

研究年度：平成 10 年度～平成 12 年度

平成 10 年度

研究代表者：出原 栄一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 講師)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
デザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

平成 11 年度

研究代表者：出原 栄一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

熊野 清貴

(芸術計画学科 助教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 助教授)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
デザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

平成 12 年度

研究代表者：西脇 友一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

熊野 清貴

(芸術計画学科 助教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 助教授)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
ライフデザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

研究経過の概要

大阪芸術大学所蔵「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料の作成を進めてきたが、今年度(平成 12 年度)は継続研究の 3 年目になる。当初の予定よりも遅れているが、小型卓上蓄音機のうち、ビクター、コロムビアを中心に基礎資料の収集、撮影を行なった。

進め方は昨年度と同様であるが、昨年度撮影した機種のうち、資料との照合結果や、蓄音機コレクター(林コレクション 林 静雄氏)から指摘された問題のある機種、未撮影のアンクルなどの補完を優先的に進めた。今年度から対象となる蓄音機がシリンダータイプからディスクタイプへと進むにしたがって、メカニズム部分の露出した機種から、メカニズム部分がキャビネットに収納された機種、蓋付き(カバー付)が多くなる。キャビネットに収納された機種は長期にわたって蓋を開けられた形跡がない機種も多い。これらの機種は蓋を開けるとカビや錆が発生しており、撮影前の清掃、整備に多大の時間を要することとなり、予定を大幅に遅らせる要因となった。

また平成 13 年 3 月に研究発表をかねて展覧会「～フォノグラフ・グラムフォンの世界～」展を伊丹市立工芸センター(旧石橋家住宅内)で開催することになったため、昨年末から展示機

種選定や展示方法の検討、展示パネルの原稿作成などにもとりかかった。

研究成果について

オーディオ資料室に保管されている蓄音機の現物、資料、文献、他の蓄音機コレクションなどとの照合、確認の上、「蓄音機デザイン調査研究」の資料とすべく、写真撮影や寸法などの測定、機種についての概要資料との符合などを行ってきた。

その結果、82機種、1機種平均15～20点の画像を得た。これらの画像はすべてデジタル画像で、全体像、投影図法的撮影、部分撮影、メカニズム撮影などである。デザインの研究テーマとなるような、マークなどの印刷部分、装飾部分、材質、構造などの形状デザインに影響を与えている部分は可能な限り詳細を撮影し、蓄音機のデザイン調査研究の資料となるように配慮した。

これらの画像はデジタルカメラからパソコンに取り込み、「JPG」ファイルとして「MO」などのメディアに保存しているが、他の資料とともに一元化して保存する必要がある。撮影済みの82機種については、概要として写真や資料を「フォトショップ」、「イラストレーター」などのソフトを使用してパソコンで加工し、「MO」に保存しているが、そのハードコピーは展示用パネルとして活用されている。

第1回は平成11年3月31日～4月18日に伊丹市立工芸センターで開催された企画展、大阪芸術大学所蔵「～蝋管蓄音機の世界～」展でパネル30枚がエジソンの蝋管蓄音機とともに展示された。

第2回は平成13年3月7日～25日まで伊丹市「旧石橋家住宅」で企画展、大阪芸術大学所蔵「～フォノグラフ・グラムフォンの世界～」展にパネル50枚をディスク蓄音機とともに展示する予定である。

研究の反省

オーディオ資料室に保管されている蓄音機の写真撮影を中心に、デザイン研究のための基礎資料の作成を進めてきたが、まだ途中の段階であり、当初の予定よりも遅れている。その要因のひとつは予想以上の保管状態の悪さで、カビや錆の発生が多数みられる。撮影よりも撮影できるような状態にするのに時間をとられた機種も少なくない。また、現存する蓄音機の個々についての資料がほとんど残っていないため、蓄音機のホーン、ハンドルなどの部品が、もともと欠品なのか、オーディオ資料室での所在が不明なのかわからない機種もあり、調査に必要な時間を費やすことになった。貴重な蓄音機のコレクションが学内にあることを知らない人も多く、保存、管理もふくめ、公開の方法についても検討すべきではないかと思われる。

今回の基礎資料作成で、写真撮影はデジタル化をはかったが、デジタル技術の進歩は早く、当初撮影に使用したデジタルカメラの画素数（100万画素）はそのときの基準から言えば多いほうであったが、現在では普及機でもこの画素数を上回っている。パソコンについても同様で、

ソフト、ハードで進歩が著しい。長期にわたる資料作成には機材の選定に十分な配慮が必要不可欠である。しかし、デジタル化された資料はさまざまな用途のための加工が容易であり、今後の活用が望まれる。

展示会用パネルの一部（ベルリナー インブルーブド・グラモフォン）



BERLINER Improved Gramophone

ベルリナー インブルーブド・グラモフォン 1899 (明治32)年 アメリカ
BERLINER Improved Gramophone 1899 USA

ベルリナーがジョンソンの協力によって製造した蓄音機。ビクターの商標である"His Master's Voice"に描かれている蓄音機の改良型である。ターンテーブルのセンタースピンドルにネジ溝が刻んであり、メネジを刻んだ押さえ金具でレコードを固定する。直径7インチ（約18cm）のターンテーブルと長さ16インチ（約41cm）のホーンを備えている。価格は、12ドル。